

これからの愛国心論議は、本書が基本となる——これが、本書に対する評者の率直な感想であり、確信である。

本書は、筆者が、「愛国心を考える」と題して、『教職研修』に連載したものを単行本としたものである。筆者自身が、「愛国心の研究は筆者にとつて永年の懸案であつた」(あとがき)と述べているように、

本書は、筆者の強い思い入れのなかで温められ、精緻な考察が施された、まさに「渾身の書」である。

しかし、筆者の課題を紐解く筆致は、あくまでも冷静で抑制的であり、禁欲的ですからある。それは、これまでの愛国心に対する論議のほとんどが、冷静な学問的検討を欠いた「自説を主張する」類のものであつたという

筆者による批判の裏返しでもある。そのため、本書の内容は、戦後の愛国心論議を歴史的に整理するとともに、多義的で曖昧な概念である愛国心の定義と内実が、丁寧に、しかも多面的に吟味される。

●愛国心を学術的に読み解く決定版

市川昭午著

愛国心——国家・国民・教育をめぐる



A5判/384頁
学術出版会
3990円(税込)

「道具」の使い方までは教えてくれない。それどころか、「われわれは、愛国心を論じ続けるようにも運命づけられており、

読者にとつて、あたかもそれは、「辞書を読んでいる」かのような感覚に捉われるが、それでいて筆者の計算された筆致はけつして読者を飽きさせることはない。それどころか、読者は、ミステリー小説での愛国心という「犯人探し」に自らも参加しているような興奮を味わうことになる。

おそらくそれは、愛国心に対する単なる歴史的・概念的な検討という、あてのない「犯人探し」ではないからである。本書の「犯人探し」には、愛国心の担い手である国民、その対象となる国民国家、そしてこの両者をつなぐ媒体としての教育という三つの信頼できる「道具」がきちんと用意されている。読者は道に迷ったとき、状況に応じて適切な「道具」に頼ればよいのである。

それは民主主義国家に生きる市民として政治的義務に他ならない(三七三頁)という本書のまとめの言葉は、最終的な解決の決断を改めて読者に投げ返してくる。筆者にとつての「永年の懸案」という愛国心を筆者自身がどう位置づけ、どう解釈するのか。詰まるところ筆者は、愛国心教育に賛成なのか、反対なのか。読者は、必死に筆者の「立ち位置」を探ろうとする。しかし、それに筆者はけつして応えようとはしない。

これは「肩すかし」なのか。そうではない。読者は、筆者による「犯人探し」に参加する楽しさと同時に、筆者の「立ち位置」を考えながら読み進めるといふ興味を同時に与えられる。読者は考え、自問自答し、ほとんどの場合は苦悶する。そして、その果てにやつと自分にとつての愛国心の意味が像を結んでいく。これこそが、筆者が本書に施した巧妙な「仕掛け」である。そしてこれは、円熟した一流の研究者のみに可能な「技」でもある。